

転生幼女の
チートな悠々自適生活

伝統魔法を使っていたら賢者になっちゃいました

2

Inuya Mamoru

犬社護

Illust.

えすけー

登場人物紹介

シャレン

オリエント商会の令嬢。
商会を立て直すために
奮闘している。

ファルナーク

猪突猛進な公爵家令息。
アイリスに
猛アタック中!?

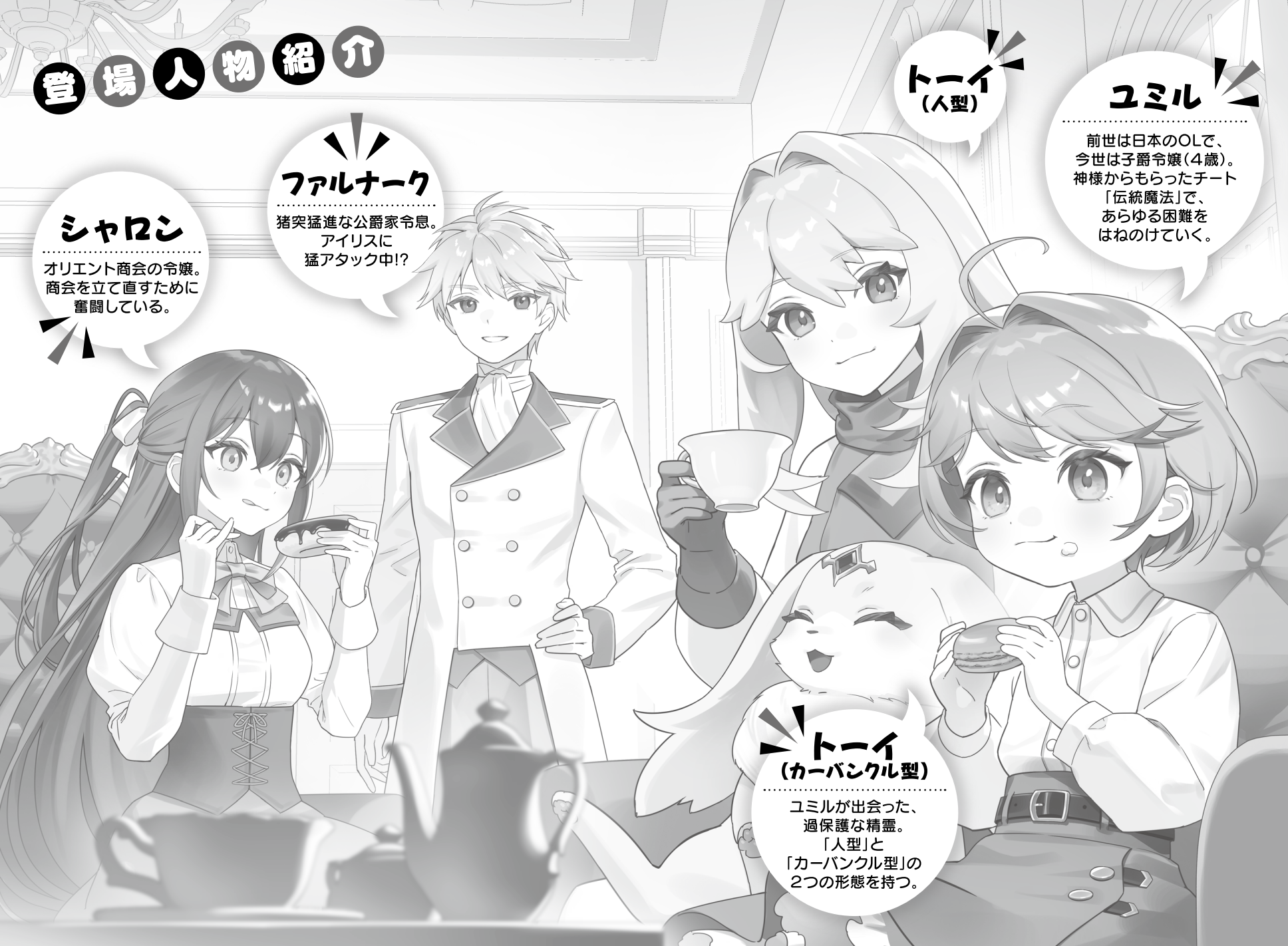
トイー (人型)

ユミル

前世は日本のOLで、
今世は子爵令嬢(4歳)。
神様からもらったチート
「伝統魔法」で、
あらゆる困難を
はねのけていく。

トイー (カーバンクル型)

ユミルが会った、
過保護な精霊。
「人型」と
「カーバンクル型」の
2つの形態を持つ。



私——ユミルの前世の記憶が覚醒した時、そこは大雨の降る鬱蒼とした森の中で、周囲には馬車の荷物類が散乱し、家族や馬が死んで地面に横たわっていた。家族の死に嘆き悲しんでいると、精霊カーバンクルのトーイが目の前に現れ、私を慰めてくれる。トーイとの出会いがきっかけで、私は神様から伝統魔法「御霊送りの儀」を授かり、この魔法で家族の魂を天へ送り届けることができたんだ。

そのあと、私はトーイにカーバンクルの聖域へ連れていかれ、長ガルト様からここで起きている危機的状況を聞くこととなる。約百年前、先代長口力様と貴族の青年の間に、隷属契約が施された。悪意に満ちた契約の影響で、現在口力様だけでなく、全てのカーバンクルが命の危機に瀕している。私はこの子たちを救うため、転生特典で得た伝統魔法「永代供養」、スキル「異界読経」を使い、悪しき隷属契約を完全に断ち切ることに成功した。これをきっかけに、私はカーバンクルたちから愛されるようになり、精霊契約と共に、加護を授かることになった。

解放された聖域で常識の勉強やスキルと魔法の訓練に励んだあと、私は外の世界を知るためにトーイと共に聖域を出た。そして転移魔法で訪れた街の名前はタウセント——ここは一年三ヶ月前に火災が起きた影響で一部の区画が今もそのままになっているため、隠れ家には絶好の場所と思いい、居を構えることにしたんだ。この街にて、精霊フェニックス族の長リアティル様、街の長マー

カス・カルバイン子爵、子爵令嬢アイリス・カルバイン様と知り合う。

そして、リアティル様から生まれた子供——ラピスが目覚めないという事情を聞いた私は、スキル「プログラム」を使い、新たな伝統魔法「口寄せの儀」を開発した。この魔法を使い、リアティル様、トーイ、マーカス様、アイリス様の協力を得て、ラピスを目覚めさせることに成功した。リアティル様からもお礼を言われ、エレメンタルスキル「源泉」まで貰ってしまう。この成功を機に、私はアイリス様ともお友達になれた。

アイリス様は、ボーション研究で注目を集めている若手研究者だ。王都で催される学会発表に向けて、研究も最終段階に入っていたのに、研究に関わる誘拐事件と盗難事件に巻き込まれてしまった。彼女の研究者生命を絶たせるわけにはいけないので、私が新たな伝統魔法「来訪神のご来訪」と「前世の経験から得た閃き」を使うことで、この絶体絶命の窮地を脱することに成功した。皆の協力もあって、事件の真犯人も王都の学会会場で捕縛することができた。

捕縛から翌日、アイリス様は「空魔石の再利用、新規技術の構築」についての学会発表を見事成功させ、拍手喝采が巻き起こる。でも、これは前座に過ぎない。高い評価を得られたからこそ、その日の懇親会は、彼女の独壇場となり、周囲からの質問攻めに遭うだろう。

第一話 懇親会でやっちゃった

アイリス様の発表が規定時間よりやや早く終わったものの、その後の質疑応答で、あちこちから質問が続く。彼女が真摯に受け答えしていたこともあり、いつの間にか終了時刻を迎えようとしている。

「皆様、終了時間となりましたので、続きは夕方から始まる懇親会で行いましょう」

学会は全四部門、二日間の日程で行われ、一日目の『薬理と魔法』、二日目の『魔道具とスキル』、それぞれの終了後に懇親会つまりお疲れ様会が用意されている。事故の影響もなく、きちんと催せるようにで安心だ。

懇親会は立食形式のパーティー、そこでの行動は自由。学会参加者たちはアイリス様を捕まえて、質問などを取り入れて、最終的に協力を要請することになる。空魔石への魔力再充填——これは幅広い分野での応用が可能であるため、彼女自身がネットワークの中心的役割を担っている。

アイリス様の終了宣言によって、見学者たちも納得し、午前の魔道具部門が終了した。皆が会場から出ていったので、さっきまでの喧騒が嘘のように収まり、静けさだけが漂ってくる。

「ふう、ようやく一息つけるわ」

「アイリス様、お疲れ様です。残るは、懇親会のみですね。頑張ってください!!」

「何を言っているの？ あなたも参加するのよ」

「私、出席できるのですか？」

ここの懇親会って、演者は参加必須となっているけど、見学者たちは先着八十名だったはず。受付は、各部門の間にある昼休み二時間限定となっているから、丁度今からだ。他の見学者たちは、その先着八十名に入ろうと、一齐に受付場所へ行っているだろうから、今から向かって間に合わないと思う。それなのに、焦りの色がアイリス様に見えない。何故だろう？

「演者が事前に申請すれば、研究関係者を三名まで招待できるのよ」

そうなの？ 全然、知らなかった。

「四歳の私が参加して、みんなから変な目で見られませんか？」

「大丈夫よ、昨日の質疑応答以降、あなたも注目されているわ。研究議論に、強制参加させられるかもね」

「嫌ですよ!! 私、何も知りません!!」

「ふふ、冗談よ。懇親会には、豪勢な料理がいっぱい用意されるから、ユミルとトイーは食事を楽しんでね」

大勢の大人の中、自分一人だけだと心細い。トイーがいてくれるのなら安心だ。

「ケンイチロウさんとレパードは？」

「レパードは私の影の中、ケンイチロウさんは懇親会会場の入口で待機しての護衛よ」

二人はあくまで護衛に徹するんだね。それじゃあ、私とトイーだけで食事を楽しもう!! こんな大きな学会の懇親会となると、料理のランクだったかなり良いはず。お腹を減らしておいて、懇親会でいっっぱい食べよう!!

〇〇〇

劣化版エリクサーに関わる研究データや資材類を根こそぎ盗まれた時はどうなるかと思ったけど、ユミルのおかげで、「空魔石への魔力再充填」という新規分野が確立された。再充填する際の魔素充填速度や充填時間などの制御面で課題が山積みだけど、私——アイリスが単独でやるのではなく、その道のプロの人たちと協力し合うことで、道を切り拓く。

普通、なんらかの新発見をした者は、国から支給される研究費だけでなく、特許を取ることによって得られる特許料などで研究資金を稼いでいくけど、そこをあえて無視し、世界中の研究者たちに無償で技術を披露する。これには相当な勇気がいる。

飛躍的な発展を遂げやすい反面、競争率が高まることで自身の業績を危うくする可能性もあるからだ。でも今回の場合、こうすることが最善だと自分でもわかるわ。応用できる分野が幅広く、私だけでは追いつかないもの。

お父様やユミルとも事前に入念に話し合い、強い自信と信念を持って、懇親会の催される会場へと入る。ユミルはお役御免と思っているのか、さっきからトレイに盛られている料理ばかり見てい

るわ。他の人たちが、彼女を放置するとは思えないのよね。誰かが興味本位で、四歳のユミルに質問するかもしれないけれど、答えられなくても誰も咎めないだろうから、放っておいても問題ないでしょう。

主催者のゴドウィン公爵が壇上へ上がると、参加者たちは一斉に沈黙し、皆の視線が彼へと集まる。

「出席者の方々、学会発表、お疲れ様でした。今年は発表前から色々と騒がれていましたが、無事に終わることができて何よりです。発表された中でもとびきり優れていたのは、アイリス嬢の内容です。皆、この場で早く発表の先を聞きたいでしょうから、懇親会を始めましょう。それでは、お手元にあるグラスをお持ちください」

私がアイステイーを右手に持つと、他の人々は成人のため、殆どが食前酒ともいえる白ワインを持つ。

「それでは乾杯！」

皆が高々とグラスを掲げ、飲んでいく。私も軽く一口だけ飲み、喉を潤す。いよいよ始まったわね、懇親会が。

大勢の人々が私のところへやってきて、共同研究の話を持ちかけてきた。皆、こぞって私との協力関係を築きたいがために、魔力再充填について質問してくるから、私も現状でわかっているこ

とを口頭で説明していく。補足資料として、用紙三枚を一セットとして箱に沢山用意しておいたけど、もしかしたら足りないかもしれない。皆のやる気に満ち溢れた姿勢が、私の心を刺激してくる。やっぱり、研究って面白いわ!!

一時間ほど真剣に話し合い、一息ついたところで、この分野を切り拓いた当の本人を見ると、美味しい料理を沢山食べたのか、トイーと共に壁際のソファアで休んでいるわ。トイーの右肩を枕がわりにして、眠いのかウトウトしているわね。周囲の人々は序盤からユミルの笑顔に癒され、今でもウトウトしている彼女を微笑ましく見守っている。

「アイリス嬢、ユミルちゃんの言葉がきっかけとなって、この発見に至ったというのは本当かい？」
サイモン・ヴァリモンド、時折私に嫌味を言う嫌な奴だけど、そこに悪意などはなく、純粹な疑問をぶつけてくる優秀な研究者なのよね。彼も、ユミルのことをかなり気にかけてくれているよね。

「ええ。彼女はなんの知識もないからこそ、時折プロ顔負けの鋭い意見を口にします。そのおかげで、あの発見に至ったことは間違いありません」

「なるほど。あの質疑応答といい、目に見えぬ核心を穿てる才能を秘めし子供のようだ。それならば、今回も試してみるか」

「は？」

サイモン様は、壁脇に用意されているソファアで欠伸をしつつウトウトしているユミルのもとへ

向かう。他の人たちも私と同様、彼の言葉が気になったのか、後方からついていく。トイはその様子を気にして警戒心を抱いたようだ。

「ユミルちゃん、眠いところ申し訳ないが、一つだけ質問していいかな？」

あの野郎、眠くてウトウトしている幼児相手に、堂々と尋ねたわ。

「ふえ？ サイモン様、なんでしょう？」

幼児が貴族の名前を覚えていることに、皆が驚いているわね。ていうか、涎^{よだれ}が出ているわよ、ユミル。私がトイに視線を送ると、彼女がすぐに対応してくれたわ。

「魔素から魔力への再充填機構の仕組みはわかったけど、一番の課題は充填速度と充填時間だ。今の技術では、魔力を沢山保有できる魔石をフル充填させるのに、一週間以上を要してしまう。君なら、この難題をどう乗り切るのかな？」

四歳児に尋ねる質問じゃないでしょうが!! 周囲も驚いて目を見開いているじゃない!!

「そういう時は、付与術師の出番だよ」

付与術師？ 今の質問の答えとどう繋がりがあるの？ 周囲も困惑しているわ。

「ユミルちゃん、もう少し詳しく教えてくれないかな？」

サイモン様もわからないようで、ユミルに続きを促す。

「うーんとね、付与するものは、人、武器、防具、衣服類だけとは限らないの。回路基盤の個々の部品や空魔石を、付与で強化させればいいの。空魔石の方はすっからかんの状態だから、付与しや

すいはずだよ」

この瞬間、ここにいる全員が雷に打たれたような衝撃を受けた。そうだ、何故今まで気づかなかったのだろう？ スキル「付与」は、様々なものに対して、様々な効果を与えることが可能とされている。

ユミルの言うように、人だけでなく、武器、防具、衣服類にだって付与可能だ。だからといって、回路基盤の個々の部品や魔石になんらかの効果を付与させるなんて考えもしなかった。本で読んだ知識だけど、魔石自体が魔物の魔力を保有している影響で、付与を行うと爆発する。それ故、魔石は昔から付与不可能とされてきた。研究者の間では、これが常識となっている。

でも空魔石の場合、肝心の魔力がなく、中身は空っぽの状態だ。ということは、回路基盤と連携すれば、様々な付与が可能かもしれない。いくつものアイデアが、私の頭の中に浮かんでくる。ここにいる全員も、私と同じ状態のようだ。

ユミルはそう言い切ると、そのままコテンと倒れて、トイの膝^{ひざ}を枕にして寝てしまった。というか、この子はどうしてもないことを言い放って寝ちゃったわ。質問したサイモン様だけでなく、周囲の人たちも驚愕^{きょうわく}に満ちた表情でユミルを見ている。

「素晴らしい……実に素晴らしい!!」

サイモン様が興奮して大声で叫ぶものだから、トイがしゅつと軽く注意してくれたわ。

「おっと、すまない。皆さん、少し移動して、今後のことを話し合いましょう」

周囲を見渡すと、参加者全員の目に、火が付いたかのような勢いを感じる。これって、フォローするのは……。

「アイリス、ご愁傷様。頑張って」

「あはは……」

やっぱり、私がユミルのフォローをするんだね。よし、やってやろうじゃない!! 研究者としての心に火が付いているのは、私だって同じなんだから!!

第二話 先代長口カとラピスの覚醒

あれ? ここって、宿泊先の部屋にある寝室だ。

夕方のはずなのに、朝になっている。懇親会は、どうなったの?

「ユミル、おはよう」

「おはよう。シャワーを浴びてたの?」

トーイがパジャマ姿のままでソファに座っていて、少し湯気が立っている。

「朝にシャワーを浴びたら、全身が刺激されて目が一気に醒めるとアイリスから聞いて、試したのさ。人型形態でのこの刺激はいいね。気に入ったよ」

カーバンクル型形態の場合、水浴びはできてもシャワーはできないもんね。そもそも、あの聖域

にはシャワー自体がないので、彼女にとって百年ぶりの新たな刺激になるのか。

「懇親会ってどうなったの? 途中から記憶がないんだけど?」

何故か、トーイは押し黙った。

「あゝ、どこまで覚えているのかな?」

「うゝんと、サイモン・ヴァリモンド様に何か言われたような気がする。そのあとから記憶がない」

あの時、何を言われてなんて返したのだろう? 全然、覚えていないよ。

「うっわ、一番肝心なところからか」

一番肝心なところ? それって、私が質問に対して何か言ったってこと?

「あのね、ユミルが核心を突くことを言い放ったせいで、あの人たちはあれから四時間くらいぶつ通しで、空魔石再充填に関わる話し合いを、懇親会の会場で続けていたよ」

トーイの一言で、私の眠気は吹っ飛びました。

「四時間!? 何を言ったら、そうなるの!? あの時は、大気中の魔素をどうやって迅速に空魔石へ充填させるかをぼんやりと考えていたような? もしかして、それ?」

「大当たり!! 懇親会の参加者たちは、大気中の魔素を迅速に空魔石へ充填させる発想を持っていなかった。だから、皆はユミルから得た発想をもとに、新規魔道回路を実現させるため、討論を続けながら設計図を考えて、その原型が完成するまで、ずくずくと話し合っていたのさ」

研究者たちの執念^{しゅうねん}って凄い。懇親会の参加者たちが協力して作り上げていけば、皆の求める理想の充填装置が完成する日も近いかもしれない。

「今、アイリス様たちは？」

「レパード以外、疲れて寝ているよ。深夜まで起きていたはずだから、今はゆっくりと休ませてあげよう。街への帰還日程だけど、学会の件もあって、当面の間未定だっさ」

当初、王都の滞在期間は六日と聞いていた。今は四日目の朝だから、今日を含めた残り二日間は自由行動の予定だけど、未定になった以上、スケジュールを練り直さないといけない。

「それと、もう一つ大事なお知らせがあるんだ」

「大事なお知らせ？」

トイー、いつになく真剣だ。

「昨日の早朝、先代長ロカ様が目覚めた」

「起きてくれたんだ!! 体調に変化は？」

出会った当初のロカ様は、百年間続く隷属契約の影響で命の火が消えかけていたけど、私の伝統魔法でその呪縛から解放されると、苦しみの表情が穏やかなものへと変化し、顔色も回復した。でも、ずっと眠ったままの状態が続いていたから、こっちに移動してからも容態が気になっていた。

「隷属契約による後遺症もなく、聖域の水を飲ませ、食事も摂ったことで全快しているよ。みんな、ロカ様が目覚めて大喜びなんだから」

良かった。後遺症が一番気になっていたところだもの。

「ここからが本題ね」

まだ、続きがあるの？

「ロカ様は長から現状を聞いて、かなり驚いていた。血縁者に対する罰、カーバンクルたちの意見全てを受け入れた上で、先代長として一つの結論を出した」

緊張の瞬間だね。ロカ様は、どんな結論を導き出したのだろうか？

「リサイドラ王国の王族に、精霊カーバンクルの身に何が起きたのかを全て打ち明ける。その上で、今でも残っている契約者の家や血族に対しての処罰を、国王に任せることにした」

良かった、ロカ様はその方法を選んだのか。

「ただ、国というものは利己的で自分本位に動く時もある。もしかしたら、僕たちの望む結末を用意してくれないかもしれない」

それは十分にありうる。現在の契約者の血族の家が国にとって重宝する貴族であるなら、国はなんだかんだ適当な理由をつけて、その貴族を守るかもしれない。

「どう対処するの？」

「昨日、僕たちが学会に行っている間、ロカ様と長は内密に王城に乗り込んで、王族との話し合いを行ったのさ」

「知らない間に、そんな大きく動いていたの!!」

百年ぶりに目覚めたばかりなのに、凄い体力だな。

「僕も聞いて驚いたよ。王族と話し合い、国王がこちらの望みを了承してくれたけど、ロカ様は念には念を押して、『もし国の下した処罰が、我々の気に入らないものであれば、それ相応の結末を用意する。例えば王族のステータスを全てリセットする……とか。そうだったら、反乱には気をつけることだ』と国王に堂々と宣言したんだって。かつこいいよね、僕もその場にいたかったよ」

何それ、超怖いんですけど!? ステータスリセットって、精霊はそんなこともできるの？

「ただ、国王の方も負けてない。『事情は十分に理解しております。しかし、百年という年月で、血縁者もかなり多くなっています。中には、国に欠かせない貴族がいるかもしれません。現在実施している血縁者たちの善悪調査、悪と判断された者たちの明確な証拠を提示してもらえませんか？ 物的証拠さえあれば、こちらも法にのっとって、早急に悪人だけを裁いてみせましょう』と言ったんだ」

さすが、民を束ねる国のトップだ。ロカ様とガルト様に対して言い返すとはね。国王の言葉は、実に理にかなっている。カーバンクル側は、悪人の血縁者だけを裁きたい。王国側は、悪人として認定するための証拠を揃えてほしいと訴えているだけだもん。

「二人はこの意見に納得した。血縁者に関する善悪調査に関しては、現在も継続中なんだ。証拠集めが追加されたけど、それはあまり苦にはならない。善悪の判断は相手の就寝時に行う。相手を一時的に催眠状態にして、言葉巧みに欲しい情報の記憶を引き出し、それを反射で自身のステータス

へ移して映像化する。この方法なら、証拠の隠匿場所もすぐにわかるって寸法さ」

その方法なら、相手側も眠っているから、負担も少ない。

「カーバンクルたちが、苦じゃないなら安心かな」

ただ、血縁者のことで少し引つ掛かるから、質問してみよう。

「血縁者が結婚した場合、その相手はどうなるの？ 血縁者じゃないから、エレメンタルスキル

「反射」を持っていないよね？」

「いや、血縁者と契りを交わした時点で家族認定され、「反射」を取得できる。可哀想に思えるけど、そっちも復讐対象者なんだ。ただし、善人なら「反射」をなくした上で封印が解除される」

うーん、それなら私からは何も言えないね。

「調査隊のみんなは、当分忙しい日が続くね。アイリス様の方はどうかな？ 私は、もう参加しなくていいんでしょう？」

「研究盗用の件に関しては、クザン・ワイナリー伯爵も捕縛されたことだし、もう安心だと思うけど、昨日のユミルのやらかしの件で、良い意味合いで新たな騒動が勃発している。当面の間、アイリスはそっちにかかりつきりになるだろうから、ユミルは僕と自由に行動していいと、マーカスから言われているよ」

やった、自由行動の許可が下りた!!

「ということは、私だけ王都を満喫していいってことだね？」

「うん。ユミルは僕と一緒に観光を楽しもう。出かける際は、ホテルのフロントにいる受付に伝言を残しておけば、マールカスたちに心配かけることもない。それで、ユミルはどこに行きたいの？」
よし、気分を切り替えて、ここからは観光だ!!

「こういう時のために、事前にガイドブックを購入しておいたの。まずは、公園で催しているフリーマーケットに行きたい!!」

「フリーマーケットか。まだ、開催期間中のはずだから問題ないね。僕らだけで、朝食を摂ってか
ら行ってみよう」

やった!! 今日、朝からショッピングだ!!

研究のことやカーバンクルの件を忘れて、久々に楽しもう!!

『ユミル、トイー、今話せますか?』

これは、リアテイル様からの念話だ。

『はい、大丈夫です』

『十分ほど前に、ラピスが目覚めましたので、一度こちらに来てもらえませんか?』

ラピスが目覚めた!? 優先順位が高いのは、当然ラピスです。

『朝食を摂ってからでもいいですか?』

『勿論、構いませんよ』

今のところ、大きな不安要素もないから、ラピスに会いにいける。朝食のあと、念話でレパード

にリアテイル様からの件を伝えてから転移しよう。

○○○

私とトイーは、ホテルでバイキング形式の朝食をしっかりと食べ、レパードに出掛けることを伝えてから、タウセントの教会内の自分の部屋へと転移した。慌ただしい日々が続いていたから、今日以降はなんの気兼ねもなく、ラピスと沢山お話しできるよ。

早速、リアテイル様の部屋にノックしてから入ると、リアテイル様がベッド傍のソファアに座っていて、小鳥が彼女の肩に乗り、二人で戯れている。あの小鳥が、ラピスだよね?

「リアテイル様、ただいま戻りました!!」

私の声に真っ先に反応したのは小鳥だ。

「この声!? 君がユミル?」

小鳥のトサカが、ピンと逆立った!! すっごく可愛い!! もう、この国の言語を話せるんだ。そういえば、精霊契約後にラピスのステータスを見た時、生まれた時点で、「精神耐性」「全言語理解」「再生」の三つがあつて、備考欄に状態異常の「脆弱」が付いていた。魂の状態が彷徨っていた時期も経験としてカウントされているから、生まれたばかりでも言葉を流暢に話せるんだ。

「そうだよ、私はユミル。あなたはラピス?」

「うん!! 僕、ラピス!! やつと会えた〜」

ラピスがこっちに飛んできて私の右肩に乗り、ほっぺをすりすりしてきた。ふわふわもふもふで、可愛いよ……。

「ラピス、こっちの女の子は、カーバンクルのトイーだよ」

ラピスはトイーを見ると、首を傾げる。

「お母さんに教えてもらったけど、カーバンクルと全然違う。ユミルと同じ人間に見える」

「ラピス、初めまして。僕はカーバンクルのトイー。これは人間の姿、こっちが……」

トイーが、カーバンクル型形態に変身する。

「この姿こそが、本来の僕さ」

「すご……いい、切り替えがかっこいい……。お母さん、僕も人間に変身したい!!」

余程衝撃的だったのか、ラピスは目を輝かせてリアテイル様におねだりした。生まれたばかりのラピスにとっては、魂の状態で彷徨っていた時よりも、外の世界は衝撃的に映るようだ。

「あなたはついさつき目覚めたばかりよ。当面の間は、私と一緒に魔力を自由に扱えるよう、訓練しましょうね」

リアテイル様、普段は包容力のある芯の強い女性に見えるけど、子供の前ではデレデレしている優しいお母さんって感じた。私もトイーも、つい頬が緩んでしまうよ。

「魔力を扱えるようになったら、僕も変身できるの?」

「ええ、人間の男の子に変身できます。変身能力を習得するまでは、ここから出てはいけません」

「ええ!? 僕も、ユミルやトイーと一緒に冒険したいよ」

ラピス、その申し出はすつごく嬉しいけど、今の状態ではだめなんだよ。

「だめです。この世界は弱肉強食です。今のあなたが外に出たら、魔物に食べられて生涯を終えてしまいます」

今のラピスは、雀サイズだ。場合によっては人も、彼をただの野鳥、もしくは魔物と勘違いして食べてしまうかもしれない。

「そんな……今すぐ外に出たいのに。ユミル、弱い子は嫌い?」

うう、距離が近い。そんなウルウルキラキラした瞳で、私を見ないでほしい。この教会内で頑張ってもらうためにも、ここはラピスを説得しよう。

「弱いラピスも好きだけど、私は強いラピスの方がもっと好きだよ。私もあなたと同じくらい弱いから、一人で外に出たらすぐに死んじゃうの。だから、マークス様やアイリス様、トイーが先生になって、私を鍛えてくれるの。ラピスも、お母さんから沢山学んで強くなってから私と冒険しよう」

今、私のいる王都は、カーバンクルの隷属契約に関することもあって、色々とゴタゴタしている。そういった不安要素がなくなるまでは、ラピスを外には連れていけない。リアテイル様もそれを理解しているからこそ、生まれたばかりのラピスに教育を施そうとしているんだ。

「足手纏いは嫌だから、僕も頑張る。僕がユミルを守るんだ!!」

小さなラピスの言葉が私の胸に刺さります。すつごく、キュンとくる。私も負けていられない。「私も頑張つて強くなるからね。少しの間だけ辛抱して、お互い強くなったら、ダンジョンに潜ったりして、魔物を沢山倒していこう」

「うん、僕頑張る!! 変身能力を習得したら、会いにいつていいかな?」

流石にこれは独断で決められないことなので、リアテイル様を見ると、笑顔で頷いてくれた。

「うん、会いにきていいよ。念話で教えてくれたら、私が召喚するからね」

「やった〜」

ラピスも納得してくれたようで一安心です。フェニックス族の次期族長となるこの子に、小さい時から色々な経験を積ませておいた方が、リアテイル様も喜んでくれるはずだ。

「良かったわね、ラピス」

「うん!!」

ラピスに関してはもう大丈夫だから、リアテイル様に現状を話しておこう。

「リアテイル様、学会発表で一騒ぎありましたけど、アイリス様の発表も大盛況で終わりましたよ」

「それは良かったわね。懇親会は?」

リアテイル様、そっちの方が重要とわかつているようで、笑顔のまま真っ先に尋ねてきた。

「私、途中から寝てしまつて覚えてないのですが、貴族様に質問された際、全員の心を射抜くほど

の助言をしてしまい、そのあと四時間くらい出席者たちで話し合ったそうです。一応、大盛況で終わったみたいですけど、私のせいで、アイリス様が現在大忙しとなっています」

記憶がないせいで、実感が湧きません。

「あらあら、良い意味でやらかしちゃったのね。トーイ、詳しく聞かせて」

ごめんなさい。寝ていて、そのあとのことは全くわかりません。トーイは、懇親会の会場で起きたことを詳しく私たちに話してくれた。私の一言がきっかけとなり、出席者たちは私からかなり離れた位置で話し合いを始め、舌戦がどんどん過熱していき、懇親会の終了時間になつても止まらなかったで、主催者側にも迷惑をかけてしまったらしい。幸い学会の最終日で、翌日は何の予定もなかったことから、出席者全員お咎めなしとなり、舌戦は継続したようだ。私、寝ている間にすつごい迷惑をかけていたのね。

「トーイ、主催者側や会場の管理者さんたちに謝罪した方がいいかな?」

「それは大丈夫。ユミルに悪意がないのは承知しているし、君の助言によって、様々な分野の研究が発展を遂げるわけだから、ゴドウィン公爵は怒るところか、喜んでいたくらいさ。君が寝ている間、色々な人たちが君の寝顔を覗きにきては、頭を撫で撫でしていったんだよ」

「そうなの!?」

みんなが喜んでくれているのなら、謝罪の必要はないだろうけど、予定を色々狂わせちゃったのは申し訳ないかな。

「ふふふ、多方面に関わる技術の発展なら問題ありませんよ。あなたは助言しただけで、そこから先は研究者や技術者たちが、その与えられた知識をどう発展させていくのが鍵となります。ユミルはもう学会発表のことは忘れて、王都観光を楽しみなさい」

いいのかな？ 責任放棄にならないかな？ リアテイル様も許可してくれたし、ここへ訪れる前、マークス様も王都観光を楽しみなさいと言ってくれている。

「わかりました。私とトーイは、王都観光を楽しみます!!」

午前中はラピスと沢山遊んで、昼前に王都へ転移しよう。フリーマーケットには、沢山の露店があつて、料理を提供する店もあると聞いているし、その場で食べられるようにテابل類も用意してあると、ホテルで購入したガイドブックに掲載されていた。せっかくだから、そこで昼食を楽しもう。

第三話 フリーマーケットへ行きましょう

私はラピスと沢山遊びました。と言っても、教会内で一緒に魔力循環訓練をしながら、一時間程度楽しく話したくらいだけどね。目覚めたばかりで、私より体力がないこともあつて、ラピスは訓練終了後には力尽きてしまい、私の膝でちゃんと眠ってしまったのだ。リアテイル様がぐっすり眠り込んだラピスを優しく抱き上げて、そのままゆりかごの中へとそつと置いた。

「ユミル、今日は来てくれてありがとう」

「いえいえ、これからちよくちよく来てもいいですか？」

「勿論よ。ここは、あなたの家でもあるのだから」

「あはは、そうでしたね。それでは王都へ戻りますね」

「フリーマーケット、楽しんでね」

「はい!!」

「トーイ、ユミルのことを頼みましたよ」

「はい。リアテイル様、それでは失礼します」

私たちは互いに笑い合い、リアテイル様にお別れの挨拶をして王都へと転移した。そういえば、トーイに転移先を聞いていなかったけど、どこに転移するのだろうか？

「なんか、暗くない？」

転移先は薄暗く、どこからか水の流れる音がしている。目が慣れてくると、天井付近に街灯らしき魔道具が規則的な間隔でいくつも設置してあることがわかった。天井も比較的高く、水の音の正体は、区画中央にある大きな窪みの下を流れる液体だ。両側面には、落ちないように柵がある。

「ここは、下水道だからね」

「下水道!? 臭いがないということは、反射で防いでるの?」

「当然だよ。王都の中で、手入れを滅多に行わない場所となると、ここしかなかったんだ」

ああ、なるほど。王都は常に開発されているから、登録地点がすぐに消されちゃうと聞いたことを思い出した。下水道なら手入れもそう頻繁に行わないだろう。

「このはしごを登れば、ホテル近辺の狭い路地に出られるよ」

「リアテイル様やラピスを連れてくる時、事前に言っておいた方がいいね」

「リアテイル様には、既に伝えてあるから安心して」

トーイは、そっとマンホールの蓋を開けてからずらして誰もいないことを確認すると、ゆっくりと地上へ出ていった。続いて私も地上へ出てからマンホールをもとの位置へ戻す。トーイが反射を切ったのか、下水道の臭いを急に感じたので、私たちはすぐにマンホールから離れた。

「反射、すぐに切らない方がいいよ。蓋を開けたせいで、まだ臭いがこの近辺に残っているから」

「その方がいいね。さあ、フリーマーケットへ行こう」

「うん!!」

異世界のフリマは、どんな感じなのかな。催されている場所は、平民法区画に位置する大きな公園内にある広場だ。目的地に到着すると、入口には円形の門が設置されていて、「フリーマーケット開催中!!」という大きな貼り紙が貼つてある。門を潜ると、そこには沢山の店があつて、ざっと見渡した限り、衣服類の店が目立っているけど、食器類、靴や財布類、魔道具類や武器防具類といった店も見受けられる。

衣服類の店は、ハンガーラックに商品を吊るしているけど、食器類、靴や財布類、魔道具類の店

は、地面に大きなシートを広げ、その上に棚を設置し、そこに商品を立体的に並べている。武器類に関しては、一つの長箱にまとめられているものと、シートの上に設置してある五段の階段式の棚に綺麗に並べられているものがある。防具類に関しては、そのままシート上に置かれているものもあれば、専用ラックに飾つてあるものもある。

「すごい賑やか!! 掘り出しもの、あるかな?」

「そんな都合よく、お宝は見つからないよ」

トーイが夢や希望を壊す悲しい言葉を言い放つた。わかつているけど、それでもこういった場所では、そういう期待感を持つてしまう。

「そうかな?」

「まあ、たまには大発見もあるから、みんなが期待感を持つのもわかるけどね。先に食事をしようお腹へこべこだよ」

「それもそうだね。食事のエリアは……あっちだ!!」

早速、食事エリアへ行くと、美味しそうな匂いが周囲に満ちており、どの店も行列になっている。麺、肉、デザートと多種類あるよ。

「トーイ、あっさりした麺から食べようよ」

「そうだね。いきなり濃いお肉とか食べたら、お腹を壊しちゃうものね」

始めに食べた麺料理は、出汁の旨味をダイレクトに堪能できるあっさり系透明スープと麺が見事

に合って、味的には台湾の麺とスープに近いかな。ここで販売されているものは、どれも手頃な半人前サイズで、そのせいもあって値段も安い。私とトーイは一人前だけ注文し、二人で料理を堪能した。

次に食べたのは肉料理、ケバブっぽいものだ。大きな塊^{かたまり}から肉を削ぎ落とし、特製タレに漬けて食べると絶品だった。あまりの美味しさで思わず、「味が見た目よりあっさりしていて、胃が重くならない、最高」と口にしてしまい、それを聞いた人たちが店に並び出し、私が食べ終えた頃、もう一度店を見ると、二十人くらい行列ができていた。店の男性と視線が合って、「お嬢ちゃんのおかげで大繁盛だ、ありがとうな」とお礼を言われた。

次に食べたのは、米料理のおにぎりだ。味が十種類もあって、どれもが半人前サイズと手頃だったので、四種類注文してトーイと一緒に食べた。トーイに、「美味しい。あの店のお肉を巻くか、中に入れて特製タレを付けて焼いたら、もっと美味しくなるかも」「あ、その組み合わせはありだね」と一品ずつ感想を言い合い、楽しみながら味わった。

最後の締めの一品として選んだのは、デザートのレモンシャーベットだ。シャリシャリの軟らかなシャーベットとレモンの味わいで、口の中が潤う。喉を洗い流してくれるだけでなく、超絶美味しかったこともあり、あつという間に平らげました。

「トーイ、美味しかったね。お腹いっぱいだよ」

「フリマの露店の料理が、こんなに美味しいなんてね。今日はここまでだけど、明日は他の店にも

行ってみたいね」

「うん!! お腹も満たしたことだし、さっきのエリアへ戻ろう」

「どこから見ていこうか?」

「各店舗を軽く見ながら、興味を持ったところで立ち止まろう」

「了解」

始めに訪れたのは、武器屋。ここは剣だけを取り扱っているようで、色んなタイプが置いてある。当然、子供には触らせてくれません。いつか、こういった武器を持ってダンジョンに行きたいね。次に訪れたのは、防具屋。革鎧^{レザアーマー}が殆どだけど、中にはチェインメールなどの金属製の鎧^{よろい}が三点だけ置いてある。こちらも子供用なんてあるわけないよね。

そうして見ていくこと五軒目のところで、私やトーイの目を惹く商品を置いている店を見つけ、足が自然と止まった。ここは衣服類や宝飾類の店のようで、看板には他と違い、全て新品と銘打って、普段店で販売しているものより二割ほど安い値段設定だよ、と宣伝している。店員は小学校高学年くらいの女の子と、メイド服を着た妙齡の女性の二人だ。店の区画はそこまで広くないから、二人だと手狭に感じてしまう。

「トーイ、見て。この髪飾り、可愛いよ」

「どれ? ああ、これは良いね。ユミルに合うんじゃない?」

「私より、トーイの方が似合うよ」

今、見ているのは青白い蝶^{ちよう}をモチーフにした髪飾りだ。四歳の私だと年齢的に合わないけど、トイーならすつごく似合うと思う。これ、いくらかな？ タグの値段を見ようとした時、どこからかアナウンス音が聞こえてきた。

『オリエント商会シャロン・オリエント様の護衛者カレン様、お客様がお待ちです。至急、運営本部までお越しください』

このアナウンスが二回流れると、女の子の横に佇^{たまた}んでいるメイドが困惑しているのが手に取るようにわかった。

「お嬢様、私と共に……」

「だめよ。呼び出している相手が本家だったら、命令に逆らったことになる。相手が誰か不明である以上、あなたが一人で本部へ行つて、用件を聞いてきて」

もしかして、この女の子がシャロン・オリエント？

「しかし、お嬢様をお一人にするのは……」

「大丈夫。そう長くならないだろうから、それまでは私が応対しておくわ」

シャロンさんは貴族のお嬢様。メイド服の女性——カレンさんは護衛である以上、彼女を一人にしたくない。それなら、私たちが一肌脱^{むくはだ}ぎましょう。

「あなたが戻ってくるまで、私とトイーがここに滞在しましょうか？」

トイーを見ると、やれやれといった表情になったけど、私は軽く微笑んで、シャロンさんたちを

見る。

「僕とユミルがここにいるから行つてきなよ」

二人は私とトイーからの申し出に驚いていたけど、それしか方法がないと理解したのか、申し訳ないといった表情になって私たちを見た。

「トイー様、申しわけありませんが、お願いしても宜^{よろ}しいでしょうか？」

「任せてよ。お嬢様を一人になんてしないから」

貴族のお嬢様を一人にする行為は大変危険なことだと、私でもわかる。カレンさんは私とトイーに深くお辞儀しながら、運営本部のある方向へと急ぎ駆けていった。

「二人とも助かるわ、ありがとう」

「いいよ、僕はトイー」

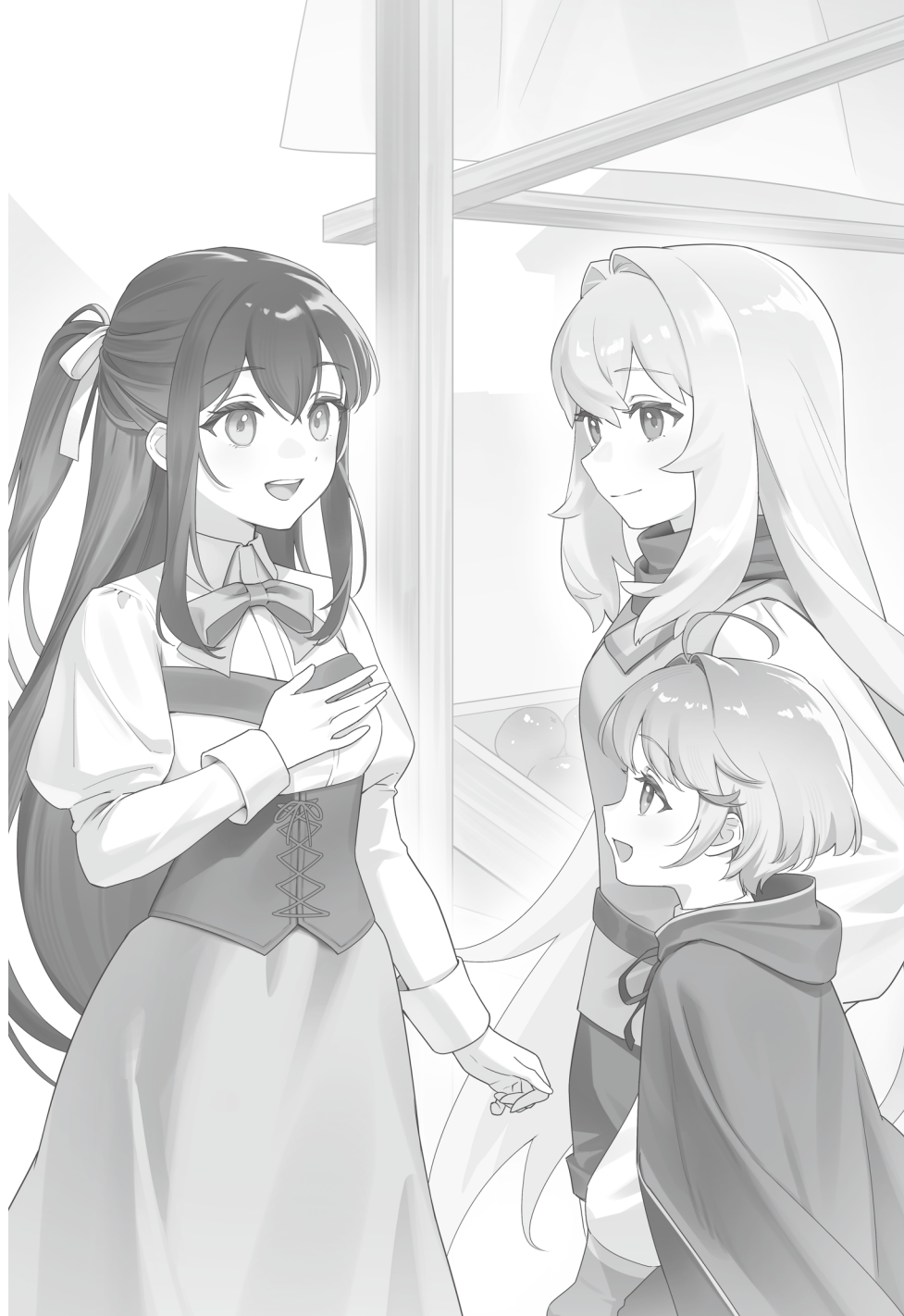
「私はユミル」

「私はシャロン・オリエント。子爵令嬢だけど、平民のようなものだから、口調を直す必要はないからね」

貴族なのに珍しい人だ。トイーも気に入ったのか、笑顔のままでいる。

「わかったよ。年齢も僕と近そうだし、このままの口調でいるね」

二人の身長は同程度だから、外見は同じくらいに見えるけどさ、実年齢はすつごい差があるからね。



「そういえばユミル、さっき、そのアクセサリに興味を持ってくれたわね」
「蝶のモチーフと色合いがすごい綺麗だな」と思って、そういえば、値段をまだ見ていませんでした」

私は蝶の髪飾りを手に持ち、タグに付いている値段を確認する。

「三万六千ゴールド!？」

タグに貼っている値段を見て、つい声を出してしまった。

「ごめんね。この商品は、著名な方が設計・デザインしたものだから、高めの値段設定なの」
「シャロンさんが申し訳ない感じの表情になってしまう。」

「私こそ、声を出してすいません」

「ユミルって、礼儀正しいわね。私の店は、最低でも五千ゴールドからなの」

「五……五千からですか。子供用のアクセサリってないですか？」

「シャロンさんは首を横に振った。」

「こういったアクセサリ類に、子供用なんて存在しないわ。どれも高価なもの」

「なんてこった、子供用はないのか。残念です。」

「フリマなら、平民用のものがあると思ったのに」

「ごめんね。平民の子供たちも、こういう商品が欲しいの?」

興味があるのか、そんなことを私に質問してくる。

「そりゃあ、欲しいですよ。みんな、おしゃれしたいもん」

「なるほど、平民の子供たちも欲しいのね。需要ありか」

シャロンさんはメモ帳に、せつせと私が今言った内容を書いている。

「おい、店のお嬢ちゃん!!」

「あ、はい、なんでしょう!」

びっくりしたく、いきなり背後から男性の声が聞こえてくるんだもん。トーイも少し怒っているけど、騒ぎにならないように、何も言わないでいる。

「その鞆も、商品なのか?」

鞆? シャロンさんの横に綺麗な鞆が置いてあるけど、値札がないから、それは商品じゃないね。これは仕事用の鞆で、商品ではありません」

後ろを振り向くと、なんか強面の三人の男性がいて、急にニヤツと笑った。

「ただの鞆なら俺が購入してやる。いくらだ?」

この人たち、シャロンさんの言葉を聞いていなかったの?

「いえ、ですから、これは売りものではありません」

シャロンさんは、こんな失礼な連中に対しても笑顔を崩さないでいる。

「俺は、その鞆が欲しいんだよ!! よこせ!!」

三人全員が周囲の商品を薙ぎ倒して、鞆を盗もうとしている!! 止めないと!!

「おじさん、だめだよ。鞆ならあっちの店に沢山あるから、そっちで購入してください」

「うるせえ!! チビは黙ってる!!」

「ユミル!!」

男が私の体を思いつきり押した。私はその力に逆らえずに後方のハンガーラックにぶつかり、咄嗟に衣服類を掴んだせいで、ラック自体が地面に倒れてしまう。その瞬間、右足に強烈な痛みが走る。

「痛い!」

トーイが慌てて、私のところへ来る。

「ユミル、大丈夫!!」

「足を捻っちゃった」

これは打ち身と捻挫かもしれない。かなり痛い。

「こいつら!! ころ……」

やば、トーイが怒っている!!

「トーイ、だめ!! シャロンさんを守って!!」

「でも……」

「お願い……」

トーイは私の言葉で我に返ってくれたのか、一人の男の筋肉質な左腕を掴んだ。

「おい、ここから離れろ」

その声は普段より低い。

「があ!? この女……」

男が悲鳴をあげた途端、バキッという音が鳴り、左腕が変な方向に曲がった。

「このガキ……」

別の男が殴りかかろうとするも、トーイはその拳を簡単に受け止め、そのままバキバキと握り潰した。多分、「反射」で力のベクトルを拳の内部に向けたんだ。

「ぎゃあ……俺の右手……!」

残るシャロンさんの鞆を奪おうとしていた男は呆然としていたものの、とにかく鞆を奪おうと動いたので、私は咄嗟に奴の鞆を引っ張ろうとする力のベクトルを反転させて、シャロンさんの方へ向かせる。

「うお、なんで!」

「ユミル、良い判断だよ」

トーイはそのまま左拳に力を込めて、男の顔面の真正面にパンチを与えると、男の顔面が変な形に歪み、一メートルほど後方へ吹っ飛んだ。観察してればわかるけど、トーイはこうして「反射」を使い分けている。相手の力を利用して、「反射」で腕や拳を折り、普通に殴って相手を吹っ飛ばす。カーバンクルって、精霊の中では非力だと聞いているけど、とてもそんな風には見えない。

「お前ら、これ以上無理に鞆を奪おうとするなら、容赦しないよ」

怒っているから、トーイの口調が普段より怖いです。

「このガキ強いぞ。逃げる!!」

「ちくしょ……」

「くそ!!」

あの三人、じさくさに紛れて商品を踏み荒らして逃げていった!! 何かやり返したいけど、激痛でそれどころじゃない。

「トーイ、追わなくていいから!!」

トーイが「反射」で追撃しようとしたけど、シャロンさんが声をあげる。

「シャロン、いいの?」

「うん……これ以上踏み込むと、あなたたちも巻き込まれる」

シャロンさん、どうしてそんな悲しい顔をしているの?

「巻き込まれる? よくわからないけど、とりあえず今はユミルの足の状態を診よう」

「そうだわ!! ユミル、大丈夫?」

まだそんなに酷くなっていないけど、あとになってかなり腫れてきそうだ。とてもじゃないけど、歩けないよ。シャロンさんが、そっと私の右足に触れた。

「痛!」

ふと気づけば、私たちの周囲は野次馬たちで溢れていた。でも多くの人たちが、私の怪我を心配してくれている。

「少し触っただけで痛むのね。今はまだわからないけど、これはあとになって、かなり腫れてくるわね。ちよつと待ってね」

シャロンさんは靴を探り、そこから半透明色の液体の入った瓶を出した。

「これは、ハイポーションよ。患部に直接かけないといけないから、右足の靴下を取るわね。痛いけど、我慢してね」

靴下を脱がされる際、めっちゃ痛みがきたけど、なんとか我慢していると、すぐにやや冷たい液体がかけられて、そこから激痛がどんどん引いていくのがわかる。

「痛みがなくなっていくます。これがハイポーション？」

「そうよ。ハイポーションなら、こういった捻挫や打ち身程度であれば、すぐに回復するのよ」
ポーションの効果って凄いな。

「あのお高いのでは？」

「お金なんていらないわよ。トイとユミルは、私を悪人たちから守ってくれたんだもの」
気づけば痛みが完全になくなっていた。

「痛みが全部消えました!! ありがとうございます!!」

「いいのよ。こちらこそ、ありがとう……って冷たい!! あ、雨が……」

空を見上げると、いつの間にか厚い雲に覆われていて、冷たい雨が降ってきた。野次馬たちは慌てて傘をさして離れていき、露店の人たちも商品の濡れを最小限に抑えるべく、片付けを始めている。でも、シャロンさんだけは、そういったこともせず、ただ空を見上げているだけで、荒らされた商品がどんどん濡れていった。

第四話 シャロンの悩み事

「シャロンさん、大丈夫？」

私が上空を眺めている彼女に声をかけると、彼女は現状を思い出したのか、ハッとして私たちを見た。

「ごめんなさい!! ずぶ濡れになっちゃったわね」

私もトイも「反射」を使用していないため、全身が大雨で濡れてしまったけど、私たちよりシャロンさんの方が気掛かりだよ。

「シャロン、僕たちはいいいけど、商品が濡れて大変なことになってるよ」

「そうね、でもこれはすぐに片付けられるわ」

そう言うと、シャロンさんはステータス画面から何かしたのか、周辺の商品全てが一瞬で消えてしまう。

「もしかして、収納靴？」

「そうよ、ユミル。みんな濡れちゃったから、オリエント商会のお店に行きましょう。あそこならシャワー室もあるから、濡れた身体を温められるわ。足は大丈夫？」

「痛くないです。全然平気!!」

「シャロン!!」

私が立ち上がったところで、近くからシャロンさんを呼ぶ声が聞こえたので顔を向けると、そこにはずぶ濡れになった一人の男の子がいた。黒髪で眼鏡をかけていて、年齢は彼女と同じくらいかな。

「シン、どうしたの？」

シンと呼ばれた男の子は相当焦っているのか、私やトイーを気にかけることもなく、シャロンさんだけを見ている。

「それは、こっちのセリフだ!! さっきの放送を聞いて、シャロンが一人だと思って急いで駆けてきた。途中、色んな人が『オリエント商会、災難続きだな。次はお嬢様が標的にされたぞ。一体、誰に狙われているんだ?』とか話していたから、正直かなり焦ったけど、怪我がなさそうで安心したよ」

「私に怪我はないわ。護衛のカレンがいない間、ここにいるユミルとトイーが一緒にいてくれたの。さっきまでいた悪党三人は、トイーが追っ払ってくれたのよ」

その言葉で、シンさんは私とトイーの存在に気づいたようだった。

「僕は、シン・ユズリハ。シャロンとは幼馴染で、商会のこともあって、頻繁に会っているんだ。

トイー、ユミル、彼女を助けてくれてありがとう」

シンさんも苗字があるから貴族なんだろうけど、平民の私たちを対等な目で見ていたし、何より深くお辞儀してくれた。シャロンさんのことを本気で心配していたんだ。

「シン、商会のお店へ行きましょう。トイーとユミルを巻き込んでしまったし、シャワーで温まってもらいたいの」

「そうだな。カレンはどうする？」

「こういう不測の事態が発生した場合は、商会のお店に向かうと事前に伝えてあるから大丈夫よ。さあ、行きましょう」

シャロンさんとシンさんに案内されながら、私とトイーは公園を離れることになった。雨がずっと降り続けているけど、既に濡れているので、私たちは傘をさすことなく歩いていく。

「シャロン・オリエント」

トイーが小声で、シャロンさんのフルネームを呟き、何か考え込んでいる。

「どうかした？」

「いや、ちょっと……ね」

シャロンさんとシンさんは互いに真剣な表情で歩き続けていて、さっきから全然喋らない。しば

らく歩き続けること二十分、二人がある店の前で歩みを止めた。入口はシャッターが下りていて、そこには大きな貼り紙があった。

【いつもご鼯員にしていただいているお客様には大変申し訳ございませんが、度重なる事故の原因が解明されるまで、オリエント商会——本店での営業を停止いたします。運輸営業に関しては、現在オリエント邸にて、引き続き受付を行っております】

「シャロン、事故で営業を停止しているの？」

トイが貼り紙の内容を確認し、それが事実なのかシャロンさんに尋ねている。私やカーバンクルに関与していないのに、彼女から質問するなんて珍しいよね。

「ええ。一週間くらい前、魔道具の暴走が三度も起きたの。暴走以外にも、棚がいきなり倒れてきたり、ガラスが急に破損したりと、おかしなことが続いているのよ。それもお客様の目の前でね」それは災難としか言いようがない。そこに今日のフリマでの出来事を加えると、野次馬の人たちがオリエント商会のことで噂するのわかる。

「お客様に怪我はあったの？」

「幸いにも、ゼロよ。商人ギルドのギルド職員が視察で訪れた際にも、暴走事故が起きたこともあって、営業停止を言い渡されているわ。原因を究明するまで、営業を再開しないように言われているの」

商売をやっている以上は安全第一。ただし、原因究明は必須事項だ。

「その日以降、何もかもがおかしくなった。店の収益が激減、契約先からも不信任を持たれ、誰かが商会の悪評をばら撒き、泥棒が家や店に入ってくる始末。もう、最悪よ」

きっかけが魔道具の暴走、ガラスの急な破損か。一週間という短い期間に、そんな事象が立て続けに発生するのはおかしい。何者かが、人為的に起こしているのかもしれない。

「シャロンさん、原因は掴めているの？」

「いいえ、手掛かりゼロよ」

「そうなると、魔物の仕業？」

「それもない。被害は、オリエント商会のこのお店だけに起きているから」

「そうなると、残るは幽霊や精霊？」

次々と質問を重ね、私が「精霊」と言ったところで、トイの表情にほんの少しだけ変化があった。もしかしてカーバンクルの仕業？ 教えてもらった気配察知や魔力感知で周囲を探索すると、店の中にカーバンクルの気配と魔力を微かに感じる。それも、一体だけだ。まさか、シャロンさんって、復讐対象者のリストに入っている？

「精霊か……心当たりはある。もう、それしか……」

「シャロン!! 客人を巻き込むつもりか!!」

シンさんからの注意で、シャロンさんは自分の失言に気づいたのか、「しまった」という顔をして口を閉ざす。

「ユミル、ごめんね。今は忘れて」

忘れられません。多分、私も間接的に関係しているので。

「トイー」

「何かな、ユミル？」

私が彼女の目をじくじくと見続けると、急に顔を背ける。

「今から、長に告げ口します」

「それだけはやめて!!」

ちよつと追及しただけで白状したよ。今、カーバンクルたちは、存命している契約者の血縁関係者に対して、善人悪人判別調査を実施している。長ガルト様から、大きな被害を出さないように注意されていたのに、シャロンさんという善人に対して大きな被害を出している。これは、由々しき事態です。

「ユミル、何を言っているの？」

シャロンさんにとっては意味がわからないよね。

「シャロンさん、詳しくは店の中で、お話します」

「よくわからないけど、とりあえずシャワーを浴びましょう」

確かにこのままだと風邪をひいてしまうので、身体を温めてから話し合いといきましょう。

〇〇〇

私とトイーはお客様ということで、二つあるシャワー室を先に使わせてもらった。今、シャロンさんとシンさんがシャワー室にいるため、案内された応接室には私とトイーだけとなっている。

「トイー、説明して。この真上にもいるでしょ？ この魔力から察するに、イマリだね」

私が名前を告げると、真上の天井裏からガタツと音が鳴る。

「ユミル、白状します。僕もリストを持っているから、この家の名前に関しては聞き覚えがあったの。だからシャワー室で身体を洗いながら、イマリからも話を聞いておいた。まず、このお店を経営するオリエント子爵家は、復讐対象者のリストに入っている……いや、『いた』が正解かな」

そうになると、もう除外されているわけね。判定自体に文句はないけど、ここまで被害が大きくなつた理由を知りたい。

「この店で、『魔道具暴走』や『ガラス破壊』という事故を起こすことで、一族の心根を試した結果、『善』と判断した。これで終わりのはずなのに、『営業停止』『収益激減』『商会に対する悪評の拡散』『何者かによる店や邸への不法侵入』といった不幸が起き続けているから、イマリだけが残って、引き続き調査しているんだ」

なるほど。それらを引き起こした要因は、イマリたちの行動にあるのは間違いない。

「あのね、トイー。こんな目立つ場所で事故を誘発させ、ギルド職員がいる時にも同じことをやつ

たら、原因が解明されるまで、長期間の営業停止になるに決まっているでしょ？ 営業停止になったら、停止期間中の収益を得られないから、状況が悪化するに決まっているでしょ？」

「軽い事故だけでどうして営業停止になるの？ 怪我人だっていないのに」

精霊は商売をしないから、リスク管理のシステムを説明しても多分わかってもらえない。それなら、そういった軽い事故でどんな結末を迎えるのかを教えてあげよう。

「あのね、そんなことが公衆の面前で起きて、その原因が全くわからないまま営業したら、人はまた似たようなことが起こるんじゃないかと怖がる。その恐怖が噂となってどんどん伝染して、その店に誰も行かなくなつて最後には潰れてしまう。オリエント商会自体は無事でも、血縁者となんの関わりもない従業員たちは無職となつて、生活苦に陥る。最悪……一家離散となり、死を迎えるかもしれないの」

私が真剣な表情で訴えていることもあって、トーイも冗談ではないとわかり、真顔になっている。

「あんな軽い事故で、全く無関係の人たちが死ぬの？」

「小さな不幸であっても、そこを起点に大きな不幸へと発展する場合もあるの。善と判断したオリエント子爵家の人たちや無関係の人々を死なせてしまったら、精霊王様も激怒すると思う」

トーイの顔が真っ青になった。天井裏の一角だけガタガタと震えているから、ようやくイマリも、自分たちの仕出かしたことに不安を感じているようだ。

「些細な不幸をもたらした結果が、『この状況』に発展し、現在も発展中なのを忘れないように。」

放つておくと、私の言つた未来が訪れるかもしれない」

「あ……」

ここでもう一押し、とどめの一言を放つておこう。

「もし、この商会が倒産して、オリエント子爵が自殺でもしたら、娘のシャロンさんは原因を徹底的に探る。彼女が真相に到達したら、カーバンクルを恨んで復讐してくるだろうね。今、あなたたちがやっているような復讐をね」

「ユミル、今から僕とイマリで長に連絡するよ」

「トーイ、待つて!!」

天井裏の一部がガタリと鳴つて板が外れると、カーバンクル型形態のイマリがひょこつと姿を現して、トーイの横に降りた。カーバンクルは個体によって毛色が異なる。トーイは薄いピンク、イマリは薄い紫だ。

「私たちの班が悪いから、私が仲間に連絡を入れて、代表して長に言うわ」

「イマリ……わかったよ、君に任せる」

イマリが同じ班の仲間に連絡を入れ、私が今の状況をさつき説明したような怖い話し方で伝える。案の定、全員が大慌てとなったので、私も連絡網に入るから一緒に話し合おうと説得すると、皆は勇気を持つてガルト様に連絡を入れることになった。イマリが代表して、善悪を判断する調査方法を説明し、私がその結果を細かく報告すると……。

『この大馬鹿共が~~~~』

やっぱり、全員がガルト様に怒られた。

『たとえば血縁者でも、善良な者たちは必ずいる。周囲に迷惑をかけぬよう、不幸の強度を必ず調整して実施しろと、口を酸っぱくして言っただけだ!! 今回は威力を抑え、怪我人こそゼロにしているが、店に与えた影響が大きすぎる!!』

ガルト様が本気で怒っているの、すっごく恐怖を感じる。

『人間の環境や営みを考えてから行動するようにと、あれほど言っただけが!! 悪ならともかく、善と判断した者や無関係の者たちを、絶対に死なせるな!!』

『長……店は営業停止中なんですけど、どうしましょう?』

イマリが恐る恐るガルト様に、これからの行動指針について聞いている。

『問題は、そこだ。我々が幸運と判断しても、人にとっては不幸の可能性もある』

この流れ、なんか嫌な予感がする。

『ユミル』

ほら、こつちに来た!! そういうのは、本来自分たちで考えるものだ。でも、今回ばかりはそうも言ってられないか。

『なんででしょう?』

『厚かましいことなのは、重々承知している。せめて、我々の行動がその者たちに不幸をもたらさ

ないか、実施する前に判定してもらえないか?』

なるほど、私がブレーキの役割を果たせばいいのか。

『それくらいならいいですよ』

私がそう言うと、あちこちから感謝の声が聞こえてきた。

『あと少いで、シャロンさんとシンさんがこへやって来ます。その人たちやオリエント子爵夫妻には、こちらの事情を説明すべきだと思います』

『できれば控えたいところだが、店を潰しかねないほどの不幸を与えてしまっている……な。やむを得ないか、そこはユミルに任せよう』

『今は、大まかな事情だけを説明しておきますね』

『了解した。トーイ、其方は引き続き、ユミルの護衛とフォローに徹しろ』

『はい』

『イマリはお詫びも兼ねて、オリエント子爵家のシャロン嬢を護衛してさしあげろ。それと、今日起きたフリマの件に関しては、我々は関係ない。今後何が起こるだろう。イマリ班は、店や家の護衛に着手しろ』

『わかりました。大切なユミルに怪我を負わせたことは、万死に値します。必ずや原因を突き止めます』

ガルト様との連絡を終えると、トーイとイマリは緊張から解放された影響で、ソファアにぐた